

梅雨と選挙

衆議院が解散されて七月四日公示、十八日投票が決まり梅雨まつ盛りの総選挙となった。梅雨空の猫の目天気悩まされるのが必至となり、短期決戦の過密スケジュールをこなす候補者にとっては選挙参謀ならぬ「お天気参謀」を抱えての戦いとなろう。「いつ、どこで、濡れるような雨が降るのか、いつまで続くのか、屋外での演説会ができるのか、交通止めとならないか」との天気予報の神髄が問われているようなキメの細かさが求められる。

選挙当日の天気、とりわけ雨と気温は選挙の投票率に大きくかわり選挙結果にも微妙に影響している。天気が選挙にどう影響したかとのテーマでの東京工業大学の田中教授の調査では、雨降りは投票率の低下を招き、六十^ミの大雨が降ると、いわゆる郡部地域では七^シほどの低下に止まるが、都市部とりわけ人口の高集中域では一割もダウンしている。雨に弱い都市部の浮動票を積極的に

狙う陣営にとっては、雨が選挙結果にかなりの影響がでてしまう。

選挙の日の十八日は平年だと福岡で梅雨明けのその日、東京では二十日、長期予報でも平年並を予想しているのでまさにギリギリのところとなる。南北に長い日本列島ではどこかに前線が停滞して、梅雨が明けた地方では盛夏の暑い日となり、明けていない地方は時には梅雨末期の大雨が降ることもある。前線の変動で「喜」「憂」し、雨と晴れとの混在で泣き笑いが分れる微妙な一日になりそうだ。

信長は梅雨を利用して乾坤一擲けんこん（いつてき）の大勝負を挑み今川軍を倒し、長篠の戦いでは梅雨の中休みに火縄銃の鉄砲隊で武田軍に勝利し歴史を変えていった。歴史の転換点での選挙が梅雨空選挙となったのも何か因縁めいている。雨は歴史を変えたが、今度こそ梅雨空に惑わされず有権者が自ら一票を投じて歴史を選択して貰いたい。